

「キリストご自身が」

エペソ人への手紙 4 : 1 1

November.19.2023

エペソ人への手紙 4 : 1 1 (パウロ)

Preface

久しぶりのエペソ書になります。

これまで、エペソ書 4 : 1 - 10 を通して、一つの御霊、一つのバプテスマ、一つの信仰、ただお一方なる神キリストの恵みの内に、特色豊かな尊い存在として私たち一人一人が召し出され、生命感躍動感あふれるキリストのからだとされたことを見て参りました。

そして、今読みましたエペソ人への手紙 4 : 1 1 では、キリストのからだである一人一人に与えられた尊い具体的な役割・職分について言及しています。

特に、今朝注目して考えて行きたい言葉は、「キリストご自身が」という言葉です。

このエペソ書 4 : 1 1 の「キリストご自身が」と訳されている言葉は、ギリシャ語原文では、「彼が」となっています。

つまり、今私たちが見えています新改訳聖書の訳は直訳ではなく、意識となっております。

新共同訳聖書、口語訳聖書、英語の聖書、韓国語・中国語聖書等では、原文通り「彼が」と訳しており、中には、わざわざ「彼が」という言葉を訳していない聖書もあります。

そんな中新改訳聖書は、「彼が」という言葉を「キリストご自身が」というふうに訳しております。

で、この意識なのですが、何とも言えない程に奥深くと言いましょか、味わい深い、目から入ってきた「キリストご自身が」という単語が心に迫り届くような訳だなあと感じました。

そこで今朝は、この「キリストご自身が」という訳に込められた深い意味を想像しながら、探っていきたいと思っております。

Part One

「キリストご自身が」と訳されている言葉、ギリシャ語の αὐτός (アウトス) という言葉は、厳密に言いますと、ただの「彼が」とか、「彼は」という人称代名詞ではなく、「彼自身が」、「彼自身は」という強調、又は、その人自身の意思が込められた三人称の代名詞であります。

ですから、αὐτός を「キリストご自身が」と訳したのは意識ではなく、むしろ、

言語の深い意味合いを的確に捉え、その意味を反映させたとても良い訳だとも言えるでしょう。

三人称単数の「彼」という曖昧な存在が、ただ何となく漠然と、「ある人たち」と称される不明瞭な人たちを、使徒や預言者や伝道者や牧師・教師として立てたのではなく、「キリストご自身が」明確な意図をもって、意識してそうなされたんだということが感じられるような訳となっています。

この「キリストご自身が」という意味深い訳に心引き寄せられながら、エペソ書4：11の御言葉「こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました」という1節を黙想していると、ちょっと違和感を覚えました。

どういう違和感かと言いますと、「そんなまどろっこしいことしなくても良いのではないか？」という違和感です。

「罪人のいのちを贖いなさる神の子羊であられ、神の子であられ、神の御姿であられ、神であられるキリストご自身が成すことであるならば、何も、イエス・キリストの十字架の犠牲によって罪赦されたものの、未だに罪を犯してしまう罪人である人間をわざわざ立てるなんていうまどろっこしいこと等する必要もなく、天地万物をお造りになられた全知全能なお方なのだから、指をパチンと鳴らしながら一瞬にして、ご自分が成さろうとしておられる御旨を成せばいいのに、なぜ、そうされなかったんだろう？」という疑問です。

「神ならば、神らしく」と言いましょうか、「すべてを圧倒するかのよう、ご自身なされたいと思っておられる救いの御業をご自身のみで完璧に成せばいいのに」と、神さまというお方の本意も知らないかのような思いがよぎってしまうのですが、使徒であれ、預言者であれ、伝道者であれ、牧師や教師であれ、そのすべてが完璧や完全ということとはかけ離れた、むしろ、欠けだらけで、傷だらけで、弱くて、主なるイエス様がお用いなさるのには足りないところだらけのような者を、「キリストご自身が立てた」と、「立てる」と仰るんです。

エペソ書の著者でもあり、使徒のうちの一々でもあった使徒パウロは、自らのことを、「取るに足りない月足らずで生まれたような者であり、罪人のかしらであり、使徒の中で最も小さい者であり、使徒と呼ばれるに値しない者です」と言うほどに、欠けだらけで、傷だらけで、弱い存在であるということを告白していました。

それなのに、「キリストご自身」が、救いのわざを成すために、奥義と言われる天にあるもの地にあるもの一切を一つになさるという大きな御業を成すために、そのような者をお立てになりました。

ここに違和感を覚えるわけです。

(浅はかな私自身の人間的な考えですが)なぜ、そんな非効率に思えるような、

なるべく良い成果を出すのには適切でないかのように思えてしまうことをなさるのだろうかと思うのです。

Part Two

使徒パウロもかつて、同じようなことを悩み、考えたことがあったようです。

「なぜ神様は、権力も、富も、学も、地位も名誉もないペテロを始めとする12弟子を使徒としてお立てになったのだろうか？」

また、自分のような教会を迫害した罪人のかしらの口を通して神の愛を語らせ、キリストの救いを宣べ伝えさせ、キリストを信じる者を起こされるのだろうか？

いっそのこと、ローマ皇帝や領主のような世の権力者や世に対して大きな影響力を持つ者をお立てになると言うならば、まあ、分からなくもないけれども、そうもされない…

さらに、イスカリオテのユダに至っては、イエス様を裏切ってイエス様を十字架に架ける道筋までつけたのに、何でそんな人までも愛し、3年間寝食をともにするという不利益に思えるようなことまでなされたのだろうか…

中々思い通りに動いてもくれず、動いたかと思うと自分本位で、自分の願う通りに事を運ばせようとする事ばかりに熱中し、自らの成果や地位や名誉にいつの間にかしてしまう可能性をいつでも秘めている普通の人間である罪人を用い、お立てになった… 「なぜだろう？」と考えたような痕跡が、第一コリントの中に見られます。

コリント人への手紙第一 1 : 18 - 21 (パウロ)

「宣教のことばの愚かさを通して」。

つまり、完璧や完全とはかけ離れた欠けだらけで、傷だらけで、弱くて、非効率で、平坦な道のように決して見えないかのように思える人々（人間）の口をあえて用いなさせて救いの御業をお進めになるということを神様ご自身、主イエス様ご自身がお決めになられた・決心されたということ、パウロは自らの生き様の中で、また聖書の御言葉をもって悟られました。

私たち人間の目には、愚かで、鈍くて、欠けだらけで、未熟に見えるかもしれないけれども、神さまは敢えて、その愚かさ鈍さと未熟さを共にされる、共にすると、共に担い、共に分かち合い、共に歩むと。

私たちの歩幅を神さまに合わせるのではなく、私たちの歩幅に神さまが合わせなさいながら、信じる者を救うと、神様ご自身お決めになられたということです。

聖書の中には、「え、こんな人が」という人が沢山出てきますが、神さまは、「え、こんな人が」ではなく、「この人だからこそ」、「この人だから」、「この人でなければ」、「この人が愛おしいから」と思っておられるということです。

神さまは、神様お一方で神であられることの出来る唯一自ら存在されるお方ですが、神さまは、神様お一方でご自分が神であられようとはなさらないとお決めになりました。

このことについては、ヨハネの福音書13章でイエス様も、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。あなたがたが互いに愛し合うことをもって、あなたがたがわたしの弟子であることをすべての人が認めるようになります」と仰っている通りです。

主なる神様、主なるイエス様は、私たち抜きに愛をお語りになることもなければ、私たち抜きにして神であられようとは思っておられないということですね。

ともすると争い、ともすると誤解し合い、ともすると傷つけ合い、ともすると自分のことばかり、ともすると見栄や自分の痛みばかり捉われ、神どころか、他者さえも、直ぐ近くにいる隣り人さえも目に入らなくなってしまうような私たちという存在をもって、ご自身神であられることをお表しになると、お決めになりました。

神様自らの存在における神の御決心に、パウロは気付かされ、そのご決心の恵みの大きさと奥深さに心砕かれ、心満たされました。

「宣教のことばの愚かさを通して」と表現されるほどに非効率で、要領がなく、賢くなく、無駄の多い決定のように人間の目には思えるかもしれませんが、それこそ神の愛であり、神の深さであり、神の高さ、広さ、長さであります。

続けて25節以降に書いてある通りですね。

Part Three

コリント人への手紙第一：25－31（パウロ）

神様は、私たち一人一人を誇りに思っていて下さいます。

取るに足りない欠けだらけで、傷だらけで、弱くて、ズルくて、愚かで、罪人のかしらのような者たちを、神さまは、「恥ずかしい存在だ」と、「わたしの御業を阻み、遅らせ、邪魔立てする者だ」とは仰らず、むしろ、「あなたはわたしの誇り」だと仰って下さいます。

だから使徒パウロ先生は、「誇る者は主を誇れ」と言うわけです。

「主の愛を、主の赦しを、主の救いを、主のおおらかさを、主の忍耐を、主が共にいて下さることを、主が私の内になおも住んでいて下さることを誇れ」と、「この主の知恵の前に感動を覚えられたならば、何と幸いなことなんだろう」と言うのです。

これが、今日の聖書箇所エペソ書4：11の「キリストご自身が」お一人でなさるのではなく、「キリストご自身が」意識して、意図をもって、人々をお立てになったという奥深い意味合いではないだろうかと思うのです。

Conclusion

最後に、ヨハネの黙示録の言葉から、もう少し、神様が私たちのことをどのように思っておられるのかということを確認して、終えたいと思います。

ヨハネの黙示録1：5－6（パワポ）

6節に「イエス・キリストが私たちを王国とし」という言葉があります。これと同じような言葉が、5：10にもあります。

ヨハネの黙示録5：10（パワポ）

「彼らを王国とし」。
この「人を王国とする」という言葉にも、少し違和感を覚えます。

なぜならば、私たちが生きているこの地上世界における国境によって分けられている国々には、国益とか、国力とか、愛国心とか、お国のためにとか、国を代表してとかというように、人のために国があるのではなく、国と表されるものために人が存在していると言いましょうか、人が使われているようなところがあると思いますが、神の国は、天の御国は、神の国のために、天の御国のために私たちが存在しているのではなく、私たちそのものが国であり、王国であり、一人一人が最大に尊ばれ、尊重される場所です。

つまり、この世の世界で、この世の国々で欠損している、国として本来あるべき一人一人の人格や存在が最も尊重されるということにおいて豊かに回復し、完成されているまことの国が、まことの国のあるべき姿が、天の御国であり、神が私たち一人一人のことをご自身そのものように思っておられる愛が、完全にあらわされている場所です。

なので、神の国・天の御国では、愛国心を問われることはありません。

国益のためにとか、お国のためにとか、国を代表してとかという、この犠牲や代償が求められる場所ではなく、私たちの罪のために、神の子・子羊イエスの尊い唯一の犠牲によって、私たちという存在が、申し訳ないほどに尊重されている場所です。

一人一人が、神の前において国そのものである、尊い命です。

だから、今日の御言葉エペソ書4：11にあります通り、キリストご自身が救いの御業を成す上で、私たち一人一人をご自身と同じように尊い存在と見なし、お立てになったわけです。

私たち一人一人は、キリストご自身が立てて下さった尊い命です。

このことを最も尊重できるような私たちでありたいと、キリストのからだでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 4：1 1